

商店街に光を！

1. まちづくりについての考え

- ・私が考えるまちづくりとは、例えるならば“郷土料理”みたいなものだと思います。つまり簡単に言うと、まちの住民というのは生まれも育ちも同じ所であればなおさらのことですが、考え方は少し異なったとしても自分の中では一番のまちだと思っているはずです。ということは、もちろんまちのこともよく知っている、住民の人間性も知っている。つまり“料理人”になることができます。自分たちで自分たちのまちを変える。あくまで専門家の方はそのサポートです。住民が間違った方向に話を進ませないようにし、アイデアを提案することがメインです。まちづくりというのは、その土地特有の個性を持ったものだと思います。

2. アイデア

テーマ：魅力的な商店街の再生（久留米 一番街）



写真-1 まだ少し栄えていた頃



写真-2 最近の昼間①

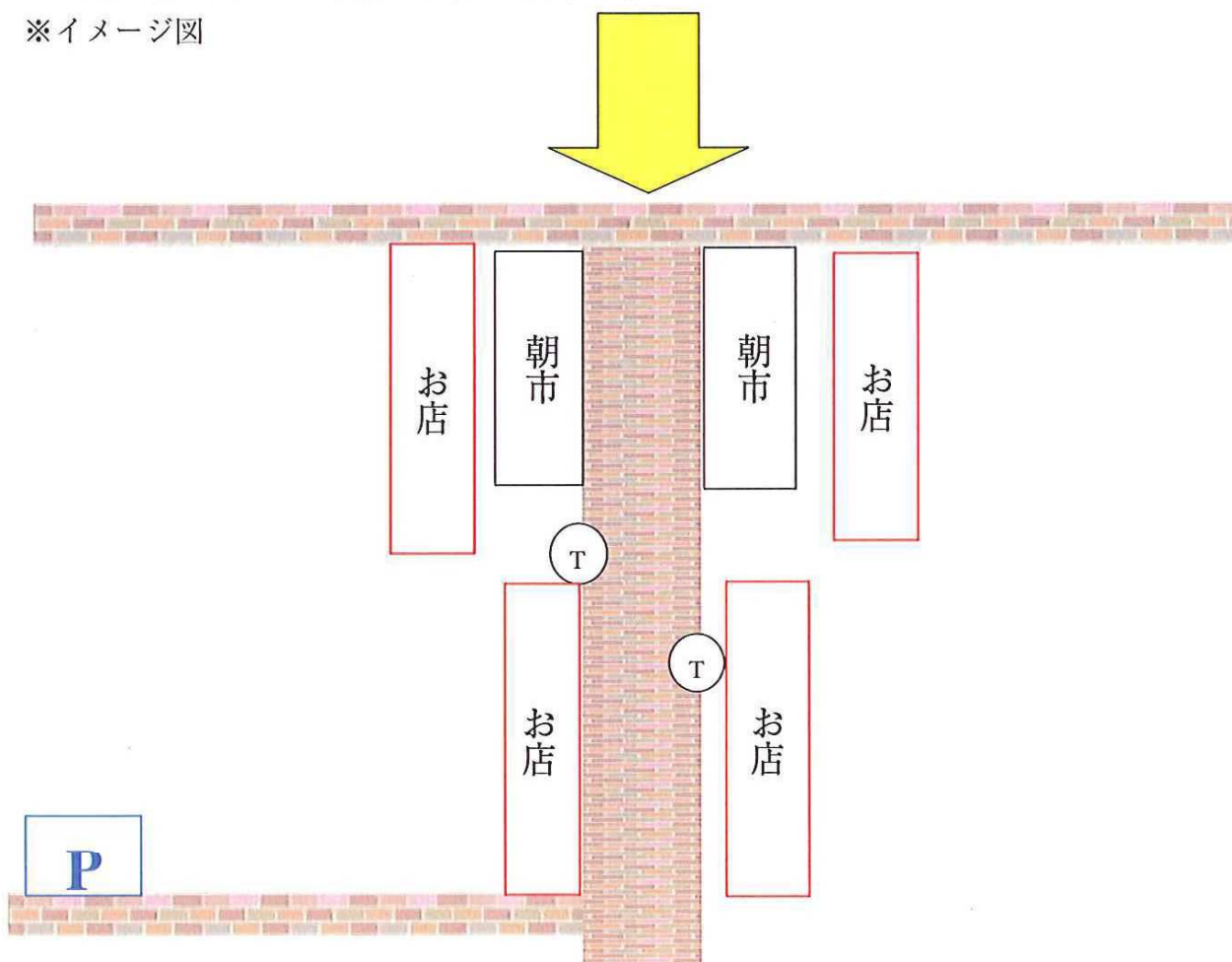


写真-3 最近の昼間②

- ・周辺住民に商店街が栄えていた頃の感覚を取り戻させる
- ・“自分たちがこの場所を利用していた感覚”をまずは思い出させるため、人を呼び込む。ただ、駅から一番街という場所がわかりづらいため、とにかく存在を気付かせるために、垂れ幕とかバルーンでも何でも良いので大きい文字で人々に存在を知らせる。
- ・商店街のマスコットキャラクターを考えても面白いと思う。

- ・地域コミュニティの再生のため、小学生にこの一番街周辺を見学させて、大きい地図を特徴や絵なんかを入れてご老人などの周辺地域をよく知っている人と一緒に書いてもらい、拡大化して駅のホームから必然的に視界に入る場所に掲示する。
- ・商店街、地域の特色を全面的に押し出したイベント、例えば地域の小学生とご老人が一緒に野菜などの農作物やその他食料品を土曜日など週一回で良いので朝市などを開いて、新鮮なものを安く販売する。子供の親御さんなんかは買いに来ると思うのでそこから少しずつ広がればいい。宣伝などはすべて自分たちでの手作業が良い。(その方が、人の心に訴えかける)
- ・人が集まってくるようになったら、栄えていたころのような演出をする。例えば一番栄えていた時の古い映画(大人が懐かしいと思うような)を週一回ぐらい上映するとか、駄菓子屋、八百屋、魚屋など・・・生活に必要なお店やここにしかないようなお店を出す。特に子供に“逆に新鮮”だと思ってもらえるように一番栄えてたであろう昭和の雰囲気を出すと思う。
- ・人の目が気にならず、でも視界が良い場所にわざと少し古そうな2・3人掛けの椅子とテーブルを出し、老人などが座ってコミュニケーションを取れるような場所を設ける。
- ・絶対に車は進入させない。(外部の人間にとっては地域人々が世間話している光景でさえも素晴らしい景観である)
- ・足が悪い老人には電動の乗物を貸し出す。

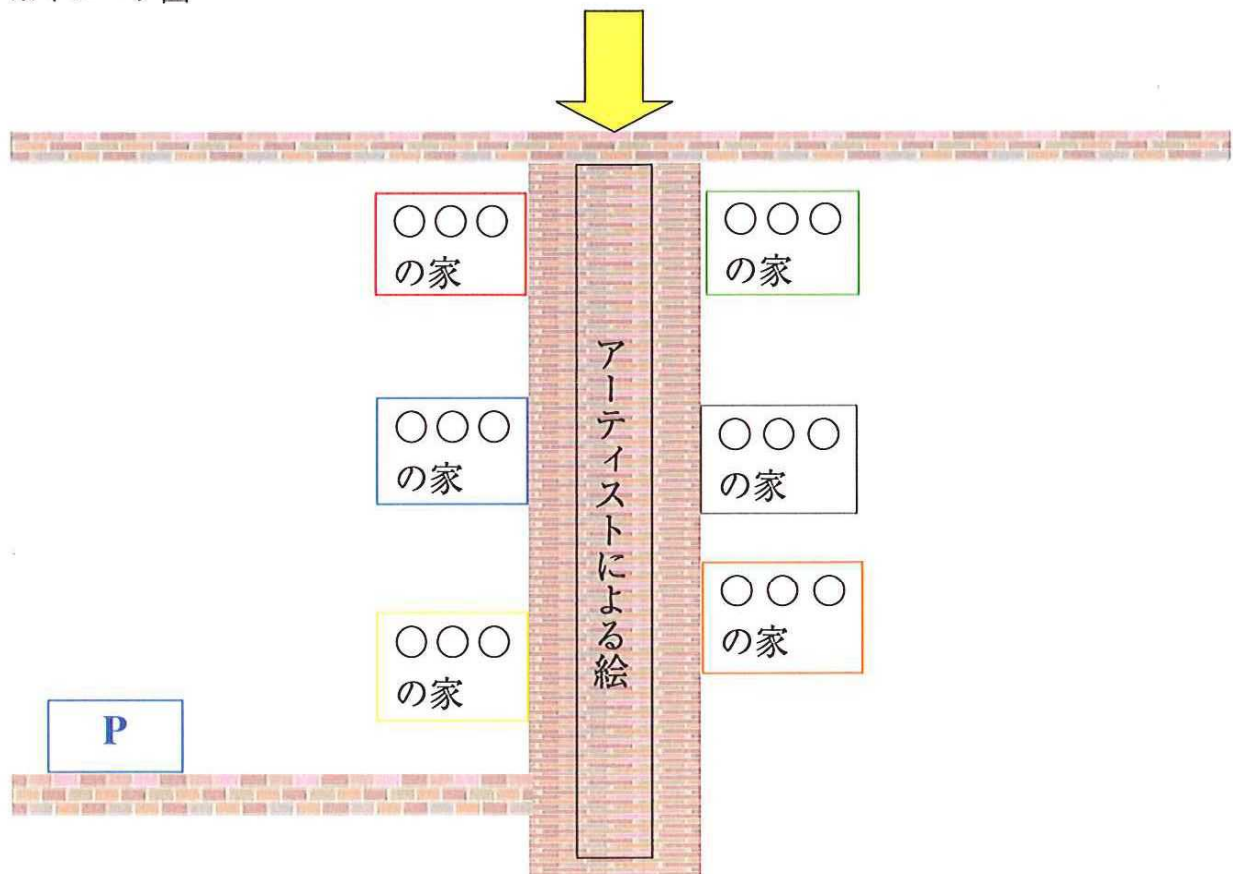
※イメージ図



(写真-2より)

- ・現状として、奥の方は開いている店もあるがシャッターが降りている店がほとんどのため、それらを無料で貸し出してまだ無名のアーティストの人達や一般市民などに絵や音楽などの自分の作品を展示・披露する場として使ってもらおう。
- ・元々の商店街の雰囲気は絶対に変えない。
- ・どの建物も“店”という表現は用いずに、“〇〇〇の家”など柔らかい表現を用いる。
- ・場所によっては、お客さんに絵を描くなどの体験も開催させる。
- ・足が悪いご老人には電気の乗物を無料で貸し出すが、基本的に歩行者天国とする。
- ・まちの中の道にもアーティストの絵を描く。
- ・まちの雰囲気に合いそうなBGMをまち全体に流す。
- ・周辺住民の小学生などの子供達とアーティスト達とで、まちに関する何らかのテーマを決めて一つの大きな絵を描いてまちに展示する。
- ・年に1・2回でいいので、市民参加の“〇〇〇コンテスト”的なものを開催して、地域とのコミュニケーションを図る。賞を取ったいくつかの作品はまちの中に一定の期間展示する。
- ・“一番街”の名前を例えば“〇〇〇アーケード”など短くてある程度のインパクトがあるものに変える。
- ・宣伝に関しては、アーティスト同士でフリーの雑誌などを制作し、自分たちで配布する。
- ・アーティスト同士でまちの名前を宣伝できる絵やポスターを制作し、駅など久留米のまちなかで人の目に付きやすい場所にはる。

※イメージ図



3, アピールポイント

私がこの提案を通して最も伝えたいのは、どんな小さな土地・地域でも必ず何かしら特徴・個性があり、住民が自分たちで自分たちの魅力無くしてしまっているということである。久留米で言えば、もうすぐ九州新幹線が開通するために JR 久留米駅が新しくなっているし、駅前には高層のマンションがそのことを見越して建設されている。確かに人口が増えるかもしれない。しかし、そこに久留米の特性があるかといえば、食べ物ぐらいである。もちろん、それはそれで素晴らしい。しかし、食べ物も含め、久留米というまちを好きになってもらいたい。そう考えた場合、やはりまちづくりが重要となってくる。例えば、京都を訪ねたいと思う人間は多い。それは建造物で特徴的なものが多いとか、伝統芸能（舞妓さんとか）が未だに残っている、食文化が素晴らしいなど理由はいろいろあるとは思いますが、すべてが一体となって更に魅力を増していると思う。ただ、京都は歴史的な意味での特殊な部分もあるとは思いますが。つまり、そのようにすべての面において個性を生かす事が大事だが、素晴らしい建造物のみ人を惹きつけ、かつ本当に素晴らしい食文化があったとしても、地域住民の魅力と全ての特色の一体感がなければ何の意味もない。なので、生活景に重点を置き以前から関心があった“一番街”をテーマにさせていただいた。商店街はその土地特有の人間味や“コイ”など、“ここが・・・だ”とすぐにわかる場所であり、その土地と人間を見て感じるができる。その日本特有の商店街の復活、その土地の住民独自の生活風景などの生活景をまず復活させ、住民の意識を高める。そうすれば、必然的に地域のコミュニティが再生してくると思う。また、別の方向性として商店街の利用方法に重点を置いたのが、2 つ目のアイデアだ。このアイデアは、地域住民と外部の人間のそれぞれが関心を持つと思われ、活性化とコミュニティの再生が可能である。そうやって少しずつまちというものをつくっていくことが大事だと思う。住民というのは自分のまちに対してものすごく愛がある。要は、その感情を引き出してあげればいいと思う。前述したアイデアを行うとほんの少しかもしれないが“魅力的な一番街(商店街)”が再生されると思う。そしてその地域の活性化につながり、一つの最高のまちができると思う。